幽霊を乗せて来たタクシー

女を降ろした運転士

大葉　華実　作
（ugcboy）

第一章　　手を挙げたのに５～６メートル先で止まる

昭和３０年代初め、まだ遊郭があった頃、友人と二人で大阪飛田界隈で遊んで夜中に近くの国道で赤い「空車」ランプの付いたタクシーを止めました。
そのタクシーは何故か５～６メートルも先で止まりドアーを開けたままなので我々が近づいて行って乗り込みました。「何でそば迄来てくれへんねん？」と運転士に文句を言いますと「今、ここで女の人が降りましたので、、、どちらまで？」と云う「昭和町。やが、そんなアホな誰も乗って無かったし降りもしなかったで」と我々は顔を見合わせながら言いました。
深夜の国道は他の車も殆ど通らなので「空車」ランプは冴えて遠くから来ても良く見えるよ、しかもこちらは二人で確認しているし、近付いてドアーを開けた時もルームランプで車内は空だった事も間違いないよ、強いて言えば白い小さな光が車の後方で横切った様に思うが、中からは誰も出てこなかったで」と云いますと、運転士も「こちらも日報にホラこの通り」と運転日報を見せ、「乗せた、降りた」　「見ない降りない」の押し問答となりました。
遂に車を止めての押し問答です。「運転士は日報、」「我々は二人で確認、」が争点のキーワードです。
「ほれ見て下さい、日報にはチャンと天満橋～阿倍野斎場、日時と料金もこのとうり書いてあります」と自信満々に見せてくれました。
「うーん」と我々は一瞬黙り込んだが、このまま引き下がれない、「売上金も合っているだろね」と念をおします。
「勿論ですよ、今日は萬札が少なくあの人で２枚目です」と云いながら運転席の奥の方から金額を出して勘定しだしました。そして「あれ？なんで？萬札が一枚しかない、もう一枚は？」　と必死に探しだしました、あッこれか、と足元から何かを見つけ、なんや木の葉か、、」と今度は全売上金を勘定しだしました。我々はここぞとばかり　「ほらね、やっぱり幽霊でも乗せて来たんとちゃうか？」とせきたてます、
「おかしいなあ、天満橋まであのホテルから中年の二人連れを乗せ女の方が一万円札出すと　「先生、私が、と男の方が出そうとすると、　「いえ、これくらい払わせて下さい」　と女の人が支払って二人は降り、その後次の交差点で　「阿倍野まで」　と云う先ほどの女の人を乗せたんやが、、、」　と回想しながら運手士もトーンダウン。先ほどの迫力は全くなくなりました。
「やっぱり幽霊やったんやなあ」「そや、そや」　と二人が顔を見合わせ云いますと、もう運転士は黙り込んで返事も何も話しません「着きましたよ」と元気のない声でいいました。その顔は真っ青で料金を受け取る手も小振りに震えています。
我々もそうは言ったものの、あまりいい気分でなくなり　「どこか開いてる店で飲み直そう」と探しましたがもう３時でどこも閉まっている様でしたが一軒　「夢のハワイ」と電気の付いた看板の洋酒バーを見つけました。

第二章　　洋酒バーでも怪奇現象が、、

午前３時はとっくに過ぎバーに入った時は３時２０分だった。「いらっしゃい」と愛想よく迎え入れるマスターが一人、カウンターだけの狭いバーで、客は中年の美人がカウンターの端で一人きり、我々は反対側の端に腰をかけ椅子を前によせないと後がすぐ壁になっている。　「何しますか？」とマスター　「ハイボール、同じもので良いで」と注文、
「はい、はい」と手際良く作られた２つのハイボールを同時にカウンターに滑らせて我々一人一人の前でピタリ，ピタリと止めました。そんな芸当事より我々は先ほどの幽霊ばなしでもちきりでした、「あの運転士の顔はすごく青ざめていたなあ、」「我らは間違いなく空車から誰も降りるのは見ていないしね、、」うーん、、、「お前まさか幽霊の存在を信じるかい？」　「馬鹿あいうな、何回聞くねん、怒るで」　「だろうね、、」うーん、、
「お客様、ずいぶん深刻なお話ですね」　いつ来たのか我々カウンターの前にマスターが立っていた。　「失礼しました、実は私もミステリーは大好きですので」　と云う、我々は今までの事を一部始終全部詳しくマスターに話したら
マスターは話を真剣な趣きで聞いていた、「ほんとに不思議な出来事ですね」　ミステリー好きな事は事実であろう。
その時、友人が「あれッ」と大声を挙げた。「どうした、どうしました」　と　私とマスターが同時に聞いた。　「あの女の人がいないよ」　「えッ」　と私もマスターも驚いた、出口はこの入口と一緒で一か所しかない。若し我々の後ろを通るなら絶対に気がつくし、だいいち狭いので必ず服に当たるので　「失礼します」とか何か声をかけるはず。　「又、幽霊かいな、？」、「今夜は気持ち悪い日やなあ～　なんでやろ?」　そろそろ引き上げようか、店ももう終いやろし、と二人で　「勘定してんか」　と云うと　「もうちょっと居てくださいよ、私も気味悪くて一人では寂しいさかい」　とマスターも不安な様子で頼んで来た。やがて妹さんが何かサンドイッチの様なものを夜食にもってやって来た。
我々は店を出て帰りながら　「お前、どう思う？今夜の幽霊の件、一つは運転士の勘違いにしても、さっきの店の幽霊は我々がじかに体験したことやしなあ～」　「そうやねん、俺もそう思っていたとこやが、、、」と二人は暫く考えながら黙ったまま歩いていました。
「おい、もうじき朝やで、今日はこれで別れよう、今度会う時までにお互いに答えを出しておいたらどうや、」　必ず何かの原因があったと思うねえ。　とお互いの意見の合った時点で別れ、来月また飲もうと約束、「その時に答えの出し合いをしよう」　と手を振って別れて行きました。

第三章　　再開して飲みに行く

あれから一か月してまた飲みに行く事になりました。現在は阿倍野再開発で立派なビルが立ち並んでいるが、当時は阿倍野旭町通りとして飛田新地や新世界の繁華街に通じる道であった「旭町」の行きつけの飲み屋へ行くことにしました。
「俺はこう思うんだが、」と友人が早速先日の幽霊事件の話を切り出しました。
「ちよっ、ちよっと待ってくれ、すまん。あれから君と別れての帰り道でまたまた幽霊事件に遭遇、今度は俺一人で気持ち悪かったで、、」とその話を先にする事にしました。「ほんまかいな、お前、、作り話とちゃうやろな、一体どんな事や？」　「実はなあ」と私、
　昭和町で別れて歩いて帰っていたら途中大きな邸宅が立並んで人は誰も通っていない、後ろの方で足音がするので、やっと人が通っているなあと安心していたが、その足音が段々俺に近づいて来るんだ、振り向くと誰もいない、「変だな」と思ったが特に気にせず歩いていると又足音が、、、今度は前より大きな音で近づいて来る、俺の真後ろかも知れないと思い切って振り向くと誰もいない。　今日はこれで三度目の怪奇現象だ、いやな日だなあ、と思い走りだし遂に四辻に出たのでそこを無理に回って行くと遂に足音は聞こえなくなった。
「ふーん変な事が続いたなあ、」　「ああ、」
「さて例のタクシーの幽霊は俺なりに解決したよ、それはあの運転士の話の中で唯一現実に有った物は「木の葉」であった、これから考えをさかのぼって行くと解決が出来たんや、先ずあの運転士が天満橋で二人連れの客を降ろした時に　「先生、支払いは私がと男の人が言ったという、すると女の人は　「これくらい私が、」と支払った。多分お茶かお花の先生で不倫関係、若しお花の先生なら襟元に木の葉が舞い込んで財布を出す時に一緒に飛出しお金に付いて支払ったと考えられる。　運転士は一万円札に気を取られ木の葉に気付かず、そのまま走って次の女の客が手を挙げたので乗せようとしたら、女の人は真後ろの彼氏の自家用車に乗り込んだ、しかし運転士は日ごろの疲れもあり丁度ラジオか何かで女の声で　「あべの」　という言葉を耳にして、女の客を乗せたと錯覚し阿倍野まで来て、我々が手を挙げたのを見て、早く女の人を降ろし次の我々を乗せようとしてドアーを開けたまま日報を記入、次の我々をのせた。と考えられる。」
「いや一全く俺もそう考えていた、大筋では全く一緒や、そうしか考えられない」　と意見は一致しました。
「次は洋酒スバーで消えた女だがこれは解決していない、いや出来ない、お手上げや」　「うん俺もだ」
「まあ飲もう、飲もう」といつも混んでいるこの店で定員を呼んだが忙しくて応答なし、そんな時、カウンターの中で調理していた若い板前がカウンターの下にある小さな扉から出てきて「お待たせしました」と応援に来た、そこでふとあの洋酒バーのカウンターの下にも扉があったか？と友人に聞いたが「いや、気が付かなんだ、なんでや、急に」と、「若しあればあそこの幽霊も解決するのだが、」　「なるほど、そうか」と友人も気が付いたらしく、今から行ってみようか、と二人は昭和町に向かった。

第四章　　また、先日の洋酒バーに幽霊がいた

「こんばんわ」と二人で入って行くと「いらっしゃいませ」と前に来たとき我々に気付かれずに出て行った幽霊がカウンターの中で仕事しているではないか、「ようこそ」と同時に傍にいたマスターがニコニコしながら軽く頭を下げ「いやーバレましたか」と云って我々の前に立って「ごめんなさい、前にも言ったと思いますが私もミステリーが大好きで先日のお話を聞きながら、ついちょっとミステリーをと、、」　　「いや、怒ってなんかしてへん、このカウンターにくぐり戸があったかどうか確認に来たんや、あの時はタクシーの幽霊でもちきりで気が付かなんだんで、、やっぱりあったんやなあ、、くぐり戸は中から客のいる方に出るという観念が多いが同時に入れる事も当然のはず」今夜はまだ早いので他の客もいて我々が入ってあと一つしが椅子が空いていない。「これ、私のおごり、」とハイボール２杯持って来た、「そんな気を使わんといて我々もまた一つ謎がとけたさかい」　「いやいや、これからもご縁に乾杯」と自分は既にコップを持っていた。
「タクシーの件は解決したようですね、どうでした」と興味深かそうにきいてきた。我々は先ほどのお花の先生の話から始まり細かく二人の意見が一致した事もまですべて話をしました。
「そう、わたしもあれは運転士の錯覚しか無い事と木の葉は単に紛れ込んだものでお花の先生とパトロンの勘定の時の事までは気が付きませんでした、確かにその時の確率が高いですね、さすが、、」と旨くほめる。
「でもねー　マスター未だ一つ変なことが起こったんだ」　「へー　今度は何ですか？」と他の客を放っておいて我々の前で立つずめ、「いやあ、彼と別れて帰り道なんだが、」と足音の話をすると、今度はすぐさま「それはウチに来られるお客様も体験されていますよ」と云うので、やっぱりあそこは幽霊が出るとこかいな？と聞くと「いや幽霊なんかじゃありません、朝方でしたでしょう、幽霊は朝はでませんよ、」　「あなたはここから斜めに近鉄線の方へ行かれたんでしたね、邸宅街を通って、、「そうや、」　「ウチに来るお客もそうですが、後で解ったのですがあの辺は門構えの家ばかりで道から門迄はみんな少し凹んでいます、新聞配達の人は門の傍に設置してある新聞ポストに入れますので一旦道から少し入り込みます、その繰り返しで、丁度あなたが振り向いた時に門のポストに行ったら見えなくなります、そして足音もとまります」
「なーんやそうだったのか。普通ならそれくらい直ぐ気が付くのだがあの連続幽霊事件で、しかも眠かったので思考力もにぶっていたんだねえ、」
「これで一晩に３回も出くわした怪奇事件の謎も全部解決、乾杯、乾杯」と改めて飲み出しました。
　しかし、私達の心のどこかに「幽霊を乗せて来たタクシー」だけは確実に否定する証拠はどこにもなく、唯一の現物の木の葉も必ずしも女の人の襟元から出たのか、財布から出した一万円札に一緒にくっ付いた件も、天満橋で手を挙げた女の客が彼氏の車に乗ったことも、全てこちらの憶測のみで無理に解決していた事は自慢できない事実でありました。

完

幽霊を乗せて来たタクシー

http://p.booklog.jp/book/42772

著者：大葉　華実
(ygcboy)

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ugcboy/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/42772

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/42772

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.